

2019年度一般入学試験(学科別) 記述式問題 解答

科目:2月5日 哲学科・学科試験

【1】

問1

文中のキーワード(「相互に利害関心をもたない合理性」)の文脈にそった正確な理解を問う問題です。このキーワードは、社会のあり方を議論する場における「②動機づけ」に課せられる「制約」を説明するものです。文中ではこの制約がない場合に議論が、人間の自然を利他とするか利己とするかという前提的想定に拡張されたり、利他—利己の二項対立に陥ったり、妬みや優越感などの感情的な対立によって錯綜するなどの困難が想定されています。動機づけに関わるテキストの範囲(「動機づけについては...単純な無関心ではない」)に述べられている困難が除去、軽減されることが意義として指摘されていれば正解とします。

【1】

問2

テキストで使われるキーワードと論点を立体的に理解し、テキストの提示する問題の文脈を尊重しつつ自身の考えを論理的に表現できるかを問う問題です。「原初状態」と「自然状態」の相違が理解されたうえで、「原初状態」の意義が解答者の見解として論理的に表現されていれば高く評価されます。キーワードの解説ではなく、そこから思想家の着想の根幹を読み取り、自身の思考態度にとりこむ作業は哲学の醍醐味の一つです。そのとき筆者の意見を正確に読み取り、テキストとしっかり対話することで、哲学的思考は具体性をうしなわず堅実に展開します。筆者の論点と自身の関心のあいだに、適当な接点を見つけて、議論を展開できるかどうかのポイントです。

【2】

問題文で論じられている哲学的な問題を的確に読みとること(または関連する哲学的問題を見出すこと)、それについて主体的に考え自分の意見を形成すること、その意見を論理的で明快な文章で表現すること、を求める問題です。一つの正解があるわけではなく、上記の条件を満たしている程度に応じて評価します。問題文の原典や作者に関する知識を書いても、評価の対象にはなりません(それに字数を費やした分、肝心なことを表現できなくなって、むしろ評価が下がるかもしれません)。問題文の主張に賛成の(好意的な)意見であるか反対の(批判的な)意見であるかも、評価には影響しません。

【採点のポイント】

問題【1】【2】に共通の方針として、文字数の過不足は減点の対象になります。また、たとえ文章としては立派な解答でも、設問に適切に回答していなかったり、独りよがりの外的な主張に終始したりしていれば、評価は低くなります。

【受験生へのメッセージ】

本学科の学科試験は、募集要項にあるとおり、哲学への関心と思考力・表現力とを見ようとしています。

問題【1】では二十世紀の政治哲学で重要な人物、ジョン・ロールズの『正義論』に関する解説文献の一節、問題【2】では、歴史上の有名な哲学者たち(キルケゴール、デカルト、カント)の作品の一節を、みなさんが思考し、表現するための材料として提供しました。ですから、採点の要点は、これらの文献や哲学者のことをどれだけ知っているかにはありません。これらの材料をもとにどれだけ考え、表現できるかにあります。

もちろん、ロールズの正義論、ホブズやロックの社会契約論、キルケゴールやデカルトやカントの思想について知識があれば、答案を書きやすくなるでしょう。それも哲学への関心の大切な一部です。ですが、知っていることを書き連ねただけの答案は、高い評価を得られません。知識をもとに、あなた自身が考え、それを表現した答案に、高い評価が与えられます。仮に、ロールズの思想は知らなくても、よい社会とはどんな社会かを考えたことがあれば、キルケゴールやデカルトやカントの思想に親しんでいなくても、真理や自己や人間の尊厳、あるいは人生や学問や倫理について考えたことがあれば、問題文の内容もそれなりに理解でき、それなりの答案が書けるはずです。それは、哲学への関心のいっそう大切な一部です。

答案が、問題文の主張に肯定的(好意的)であるか、否定的(批判的)であるかは、評価の要点になりませんが、一般に、自他の意見に対する批判的な視点がなければ優れた思考や表現になりにくいのも事実です。また、せっかく思考しても、それを文章で上手に表現することができなければ、高い評価は得られません。日本語の文章力は表現力のもっとも重要な部分です。豊富な語彙と論理的な言葉遣いが決め手になります。これらは、ひるがえって思考力の糧にもなります。また、誤字や脱字があったり、小さい字、薄い字、崩し字、乱れた字で書かれていたりすれば、採点者に文意がうまく伝わらず、結局表現力がないのと同じことになってしまいます。

なお、以上のメッセージは、哲学科のアドミッション・ポリシーを反映したものです。アドミッション・ポリシーは、本学のWebページで閲覧することができます。